

編集後記

* 巻頭は、沖縄現地報告（深沢一夫）。矢吹晋先生の連載（11回）は南シナ海問題です。

参院選が終了したと同時に沖縄ではヘリパッドの攻防が展開されている。アメリカ大統領選で日米関係がどうなるのか心配なのか、安倍政権は焦り始めているようだ。沖縄の悪いところはすべてアメリカにあるという権図はそろそろ崩れるのではないか。沖縄の少女暴行は自衛隊員もやっており、事実、犯人は20年ほどの実刑にもなっているのだが、報道管制を敷いて話題にしないだけです。

6月19日、沖縄県民集会に参加してきました。参加者は6万5000人。現地集会の報告は、翌日の二大紙で克明に報告されています。「怒り、悲しみ限界」など。特に印象に残ったのは若い青年、男女の怒りではないでしょうか。彼ら若い世代の米国政府や日本政府への糾弾、たとえば玉城愛さんのあいさつは参加者全員に多大なインパクトを与えたと思います（ネット参照）。民衆の自己決定権は揺らぐことなく着実に若い世代に受け継がれています。沖縄は希望があります。これからの沖縄に必要なことは積極的な自立の構想だと思います。日本の政党の下請けみたいなものはまずはいらない。時間がかかるかもしれないが沖縄独自の政党が必要だ。お隣の台湾ができて沖縄ができないはず

はない。沖縄ができるようだと言州島にも可能性がでてくる。そうすると東アジアの平和は確固たるものになるだろう。わたしは原点が島の人間なので当たり前に出てくる発想なんです、どうだろうか。

辺野古現地（テント）にも行き、安次富さんから現地情勢をお聞きする。また41年ぶりにひめゆりの塔を見学。時代は変わっても沖縄の心は何も変わってはいない。そんなことを実感してきました。

* さて情況誌本号の書評特集は、張一兵「レーニンへ帰れ」、「哲学ノート」のポストテクストロジー的解説（中野英夫訳）出版記念特集（第1弾）です。

張一兵「レーニンへ帰れ」は、素晴らしいレーニン論ですね。おそらくレーニンを神様にまで高めた冷戦期の方はその真髄が即座にはわからないのではないかと。張先生の「レーニン」哲学ノート」研究はおそらくこれからの時代の「レーニン」の思想に関する原点となるものだ。推薦文にあるジジエックの提言が真理に近いと思います。その一部を紹介する。「張一兵教授のこの新しい本はただ中国社会主義建設のためのものだけでなく、その哲学的深みの中から共産主義の試みを復活させたいと思う人々全員にとって重要なメッセージを含んでいる。」

張一兵さんは、南京大学哲学科の先生です。広松渉氏の研究所も南京大学内に設置されています。南京大学共産党書記とか南京大学副学長だとかの肩書もありのようですが、今頃の中国ではマルクスやレーニンをテーマにする学者、あるいはそんな肩書の先生は中国の若い研究者からすれば不人気の代表なのですが、ところが張先生は別格のようです。

日本に来ていた院生たちの何人から聞いたのだが、張先生には何とも言えない魅力があるという。現代思想系にも強いというのも魅力のようで、日本によくいる現代思想の解説者のレベルではない。しかもジジエックいうところの哲学的深みがあるということのようです。日本では中国批判が体制側も反体制側も強い。なんでも批判すればいいという習慣がある。特に左翼は革命も実現していないのに革命を実現した中国の暗部だけを見てあれこれ批判する情けないところがある。やれスターリン主義だとかという無内容な空文句である。人を批判するときはわれとわが身を自己反省してから言わないと誰からも信用されない。日本の新旧左翼の凋落は基本が腐っているという認識がないところにある。

さて、書評の筆者は2年ほど編集にあたった情況編集部の記事者、さらにヘーゲル研究者、寄川条路先生、稲葉守先生にお願いした。編集

部の見解はレーニンの哲学的深化に簡潔に、具体的に触れております。寄川先生は中野さんとの交流があり、新しいレーニン像では意気投合しておりましたね。「哲学ノート」のポストテクトロゾーの解説について根本的な理解をされております。

稲葉先生の書評は長文です。二度も丁寧に「レーニンへ帰れ」を読んでいただき、感謝しております。また編集過程でもケドロフについてロシア語で調査していただいた。失礼ながら学術的にはかなり厳密な方だとお見受けしましたね。すっかり信頼しております。おそらく「レーニンへ帰れ」は稲葉先生にかなりの衝撃を与えたのではないかと推測しております。結論としては、啓蒙書としては成功だが、専門書としては失敗というものです。それはそれでいいと思います。問題は中身ですから。稲葉先生は寺沢恒信先生のお仲間で、ヘーゲル専門家ですから独特のご理解があるのかもしれない。世代的にはスターリン主義時代の古い世代のレーニン主義者でわれわれ60年世代とも違う、新左翼的なマルクス主義やレーニン主義の地平を認めてはいない。簡単に言うとスターリン主義者なのかとも思いますが、新旧左翼自体が冷戦期の産物でしかなくて、特にレーニンに關しては世界的に抹殺された経緯があり、現在では通用しないのも事実。それでもレーニンは不滅なところがあって、今蘇りつつあるところだと思えます。たとえば、白井聡さんや長原

加藤先生の提言は、過去の情況別冊「ヘーゲル特集（1975年11月臨時増刊号）」での上妻精先生との対談を含めて何度も読ませていただきました。弁証法とはなかなか厄介なものなようです。山口祐弘先生の野心的な構想には驚きです。大論理学の新訳（作品社）は偉業です。熊野先生からは山口版で決まりだとか。論文の中身はわからないが、緻密で迫力があるふれています。山口提案が理解できるようになりたいと思います。滝口清栄先生のヘーゲル法哲学に関する問題意識はこれからの大きな課題ですね。ヘーゲル体系はヘーゲル左派がぶち壊しました。ヘーゲル法哲学批判のなかでマルクスはプロレタリアートという階級を発見した。寄川先生は先に指摘しましたが、ポストモダンをちゃんと理解されている。新しいヘーゲル読みを追求されているものと思えます。ヘーゲルの講義録に着眼する生きた観点は大事ですね。世界書院では「あいだの解釈学」（教科書）でお世話になってる。生徒との生きた関係を大事にするのはヘーゲル研究も同じようですよ。

また、わたしが参加させていたたいっている専門家のヘーゲル研究会の久保先生に論文を書いていただきました。とにかく久保先生はあの難解な大論理学を自分の言葉で説明してくれるので、実にわかりやすいです。それにしてもヘーゲルの大論理学の読解はなかなか困難のようです。加藤先生の裸の王様という指摘は的確な表現です。一つ一つの提言

豊さんがレーニン別冊(題名は「レーニン再見」)を本誌でも出版している(在庫なし)。結論的に言うとう新旧左翼のレーニン論はすでに死滅している。ただし東アジアでは政治局という名のレーニン主義が形骸化して歪んで生き残っているという意見もある。もちろん私の意見ですが、やはりロータールな基本線ではない、ジジエックあたりのレーニン論が冷戦崩壊後の現在のものになるかと思えますね。そしていよいよ張先生のレーニン論の登場場ということになる。しかし稲葉先生の張一兵批判はそこに争点があるわけではない。張先生との対決は、ヘーゲルを読み込むような勢いで「レーニンへ帰れ」を読み込み、先の結論を導き出している。つまり稲葉先生ご自身のヘーゲル研究者としての立脚点にかかわる問題として読み込んでおられますね。日本での「哲学ノート」の研究者であり、かつヘーゲル哲学の専門家としての自負にかかわる提言ですね。ポイントが、ヘーゲルの絶対的理念の方法である思弁的方法をレーニンのように弁証法的方法とみていいのかわるか、その根拠はどこにあるのかですね。本誌での久保陽一先生の論考「ヘーゲル論理学における「絶対的理念」の生成」の水準があればそこを解けるのではないかと推測しております。ぜひお願いしたいですね。

すでに張先生も稲葉提言は読んでおられます。誤解の部分はたいしたことはないので無視ですが、当然ながら張先生も反論を準備しておられ

の理解自体に多くの議論が必要で、しかも全体からするその意味を読み取るのに専門家の皆様も苦労されている。フォイエルバッハのような方はなかなかない感じですね。もちろん彼にはマルクスのようなヘーゲル弁証法についての内在的考察がないようですよ。それにしてもマルクスの弁証法とは何か、ヘーゲルとの違いは何かと問われれば大変困る問題ではありますね。*
さて、特集にある先生方の論考も何度か読ませていただきました。大論理学そのものの理解の上で研究者のレベルを垣間見た感じがします。感謝したいです。

わたしは実践家なのでヘーゲル左派がらみやマルクスがらみでのヘーゲル観しかない。雑学ですね。マルクスがヘーゲルを超えているとかいう意見もあるが、わたしもそう言うことがあるが本当にそうなのかわからない。そもそもマルクス自身は特に弁証法について概念的に説明しているわけでもない。若いころの記憶では、許萬元先生から概念的把握という考え方を学び、その後加藤先生の東北大時代の精神現象学を読ませていただいた記憶があるだけ。だから大論理学についての考察や提言は初めてです。ヘーゲルは大論理学を初めて読んでみたがマルクス資本論とはまるで関係ないものという印象ですね。ヘーゲルとマルクスを「ごっちゃにする人たちや学者もおられると思えますが、武市

ますね。9月11日の出版記念会のシンポジウムではかなりの厳しい論争になろうかと思えます。テーマは「哲学ノート」をめぐる弁証法の問題、ヘーゲル概念論をどう読むのかですね。

さて、それを機にレーニン、マルクス、ヘーゲルについての日中での大論争が起きれば面白いというのが私の提案です。東アジアの政治文化は根本的に同じですから。そして世界のレーニン主義者をお呼びするの国際シンポジウムができれば最高ですね。わたしはすべてとは言いませんが、やるよと決めたら実行する性質なので。いまだ極左の癖が抜けていなくて困っています。

* 本誌の特集。ヘーゲル大論理学、概念論刊行200年記念特集が中心です。

ヘーゲル特集は情況誌の専売特許で、過去に何度かありました。広松さんの時代ですから当然でしょう。しかしわたしの情況誌になってからは初めてです。何しろ大論理学、概念論刊行200年記念と聞いたものだから。やらないうけにはいけません。時期的にレーニン「哲学ノート」や大論理学を拾い読みしていたので決断は早かったです。早速、加藤尚武先生に相談させていただく。熊野純彦先生には、山口先生の大論理学の新訳があることを教えていただき、滝口清栄先生には若い先生たちを紹介していただきました。

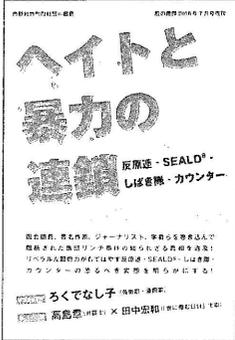
* 実践家から見るとヘーゲルはとても魅力がある面とても危険な面があると思えますね。端的に言うと、日本の新左翼の内ゲバはヘーゲルの影響が大だとみていい。特にヘーゲル概念論のところは政治や党組織と結びつく危険極まりないのです。セクト主義の完成形態を生むからです。有(存在)論、本質論、いわゆる客観的論理学は、移行すべき、つまり飛躍すべきところは主観的論理学(概念論)であってはいけない。これはヘーゲルの大論理学の大失敗です。もちろんヘーゲルの責任ではないのだが、概念の自己運動は党の自己運動へと飛躍してしまう。レーニンの「哲学ノート」(ベルンノート)のすごいところは徹底してヘーゲルを学びつつも自分の立場を崩していないところですよ。ヘーゲルにのめりこむことはいわゆる左翼は知的訓練を受けていないものだからどうも信じ込む弱さがある。それはさておき、ヘーゲルのカント批判、つきつめれば物自体の清算の仕方に問題があるのではないかと感じています。誰かそんな研究者はいないのか。素人の直感ですら本気にならないほうがいいと思いたいだこうかと思えます。浜野さんの専門はカントですから。

ヘイトと暴力の連鎖

反原連-SEALDS-しばき隊-カウンター

鹿砦社特別取材班＝編著 A5判/104ページ ブックレット 紙の爆弾2016年7月号増刊
定価540円(本体500円)

国会議員、著名作家、ジャーナリスト、学者らを巻き込んで隠蔽された
集団リンチ事件の知られざる真相を追及！
リベラル左翼勢力がもてはやす反原連・SEALDS・しばき隊・カウンターの恐るべき実態を明らかにする！



- 好評発売中!!**
- SEALDS奥田愛基君への手紙
 - [インタビュー] ろくてなし子(美術家・漫画家)
「逮捕」も「ばよちん騒動」も笑いで吹き飛ばせ!
 - [対談] 高島章(弁護士)×田中宏和(「世に倦む日日」主宰)
しばき隊・SEALDS現象の病巣を斬る!
 - 社会運動の中の獅子身中の虫
反原連・SEALDS・しばき隊・カウンター
 - 反差別運動内で発生した深刻なリンチ事件の真相はこれだ!
 - 急展開した「しばき隊リンチ事件」の真相究明
 - 有田芳生参院議員の宣伝カーに乗ったしばき隊員に襲撃された市民
 - 有田芳生参院議員の「集団リンチ事件」隠蔽関与の疑惑

SEALDSの真実

—SEALDSとしばき隊の分析と解剖

「世に倦む日日」主宰 田中宏和＝著 B6判、総224ページ 並製・カバー装 定価：1200円＋税



突如現われ、2015年安保法案反対運動を席卷したとされるSEALDS—その<真実>とは? 背後の防衛隊=「しばき隊」とは? 2万2000のフォロワーを持つ人気ブログ&ツイッター「世に倦む日日」主宰者が、知られざるSEALDSと、その裏部隊「しばき隊」の実態を分析し解剖した衝撃の書!

【主な内容】

- 第1章 SEALDS運動とは何だったのか
- 第2章 SEALDS裏の防衛隊=しばき隊とは何か
- 第3章 SEALDSをめぐる知識人の動き



【本社/関西編集室】〒663-8178 兵庫県西宮市甲子園八番町 2-1-301
TEL 0798(49)5302 FAX 0798(49)5309
【東京編集室/営業部】〒101-0061 東京都千代田区三崎町 3丁目 3-3-701
TEL 03(3238)7530 FAX 03(6231)5566

◆書店にない場合は、ハガキ、ファックス、メールなどで直接本社にご注文ください。
送料サービス、代金後払いにてお届けいたします。
メールでの申込み sales@rokuseisha.com ●郵便振替=01100-9-48334

好評発売中!!

さて、問題は概念論です。無批判的なヘーゲル研究というものはありなのかどうか? ヘーゲルも所詮は人の子ですから。ヘーゲルには止揚とか言いつつベテンの飛躍が多すぎます。

中畑先生は概念論の移行を論じている。7の2のところは、レーニンが知ったら大喜びするテーマですね。「受動的実体は暴力を被らざるを得ないし、作用する実体は暴力を行使しなければならぬ。なぜなら、存在の直接性を止揚しうるのと同じく直接性である(外的である)威力の直接性すなわち暴力以外にあり得ないからである。」しかしこれはどういう意味なのか? なぜそう言えるのか?

三重野論文(「対立者の統一」)もヘーゲルの最も危険なところをテーマに論じています。「大論理学」における「対立」とその進展の章です。

したがって「肯定的なもの」と「否定的なもの」として対立しているのは、もはや「対立」に属する二つの項ではなくて、「自己関係」と「他者との否定的関係」、つまり「非対立」と「対立」というより高次の領域であることになる。云々。ヘーゲルに対する三重野先生の意見はどうか? ヘーゲルの体系に入ると出るのは難しいのはよくわかります。すべてうのみにする必要があるのかどうか。

大河内論文「概念論」「認識の理念」の章の読解を見事に整理してくれています。一分の隙

もない論考です。わたしのお聞きしたいのは概念・理念の自己運動はどういう意味を持つているのかということ。端的に言えば、果たして正しいのかどうか。そんなことはあるのかどうか。大河内さんの意見が大事ですね。

最後に、山脇論文は「推理は概念論の原理である」「観念は無限と有限との総合であり、全哲学は観念の内にある」というテーゼから概念の構造まで、判断論の考察まで踏み込んでいっている。ヘーゲル観念論とは何か。実にわかりやすいです。それにしても深い考察をヘーゲルはしているようですよ。

ヘーゲル自身は楽しみながら哲学を創造している感じがします。問題は、ヘーゲルはそれではないでしょうか、研究者はなんと考えるのか? そもそも絶対対知・絶対者というものは何なのか。

黒崎先生の論考は始元論です。マルクスとヘーゲルの論理的な違いはどこにあるのかお聞きしたいです。川瀬論文によれば、ヘーゲル・ルネサンスが起きているようです。英語圏ではどうなっているのか。少し希望が湧いてきそうな感じがします。徳増先生の提言があるようです。徳増先生は原稿執筆予定だったのですが、体調が悪く別の機会となりました。レーニンとの関係も深くあるのでしつこく継続したいです。

次号は経済学特集です。鎌倉孝夫先生はじめ現代帝国主義論・資本主義論が論じられることと思います。久しぶりに広松涉論が予定されております。お楽しみに。(大下)

●情況二〇一六年六月・七月
二〇一六年七月三十一日発行

●「発行所」情況出版株式会社
〒一〇一〇〇六五

東京都千代田区西神田三十一―二ウインド
西神田ビル五〇二

【電話】〇三―五二―三三―三三三九
【ファックス】〇三―五二―三三―三三三九

●「編集発行人」大下敦史

●「印刷製本」(株)シナノパブリッシングプレス

●「表紙デザイン」杉本健太郎

●郵便口座記号番号 00180-8-49197

ISBN 978-4-915252-95-2 C0002

定価、一八五二円＋消費税

落丁本、乱丁本はお取替えいたしません。

本を包摂することになるだろうというの
世界の常識だ。わたしが心配することでも
ないが、日本の外務省は実に情けないです
ね。
積極的に世界史的な過渡期がすでに生
まれているということです。

* 矢沢さんの新連載「資本主義像の再構
築」(上)が提起されました。これまで
の米中同盟の経済学的考察に続くもので
す。1980年代からのパクスアメリカ
ナの解体(冷戦・ドル体制の崩壊)から
現在の金融のグローバル化時代を考察し、
2008金融恐慌以降の資本主義終焉論の
中味を論じるのが目的です。お楽しみに。

* 矢吹先生の中国観照(第10回)は「蔣
介石とカイロ宣言」です。現在進行してい
る米中の二国間交渉において、アメリカに
は沖縄基地は軍事戦略的に必要がない。特
にアメリカ経済にとっては沖縄基地に海兵
隊を置くこと自体がマイナスイメージでしかな
いこと。このことが、明確に打ち出されて
いる。わたしが安富さんに沖縄の様変わ
りが始まるようだと報告したのはいつご
ろの事だったか。その後、アメリカは、安
倍政権と沖縄県との裁判交渉に踏み込ま
せたりしている。つまり、どうしても辺野古
基地がほしいのは安倍政権だけで、それが

うまくいくかどうかが怪しくなりつつあ
る。先ほど述べた翁長知事のアメリカ議員
への働きかけもそれなりの根拠が合つての
ことで、大事な政治的な意味がある。アメ
リカの次期大統領次第では沖縄が大きく変
わる可能性があるということだ。肝心なこ
とは沖縄民衆の自己決定権が最後には勝つ
だろうということですね。安倍政権がアメ
リカの意向を無視して沖縄を自由にできる
のかどうか。沖縄と日本の矛盾は今後ま
ます大きくなるだろうということです。矢
吹先生は専門家ですから現実政治のことだ
けでなく、歴史的事実に基づく唯物論的な
見解を提起されますから、歴史的に日本敗
戦の中で米国の沖縄支配・尖閣支配政策
がいかなるものだったのか。沖縄を巡る蔣
介石との外交交渉まで掘り下げおられる
ということですね。(7月には、矢吹先生
は情況新書「沖縄の縄を解く―ダレス流
縛り方 Residual Sovereignty Sovereignty
Sovereigntyの秘密」を出版する予定です。
おそらく今までにない沖縄を巡る画期的な
新書となりますね。)

* さて今年にはチェルノブイリ事故が起きて
30周年です。いくつかの特集が出されて
おります。本誌のもすぐれた特集ですね。
筆者は今中哲二さん、奥村岳志さん、蔵田
計成さんです。今中さんは、チェルノブイ
リの「16年テレーゼ」のみが40代の筆者で、
矢部さんかと思われ。アナーキズムと
思っていたら何だかレーニン主義に転換し
ているようで新鮮ですね。感想は読者の皆
さんにお任せいたします。編集企画はりべ
るさんの増井真琴さんです。

* 特集は「学生の叛乱」です。基調提案は
実に分かりやすいです。現在の大学のあり
よう、そこでの学生たちの生活・学業、生
き様などリアルです。シールズ運動の評価
は決り出されており全く正しいですね。栗
原さんは30代の政治学者で、すでに多
くの単行本を出されています。わたしも「現
代暴力論―暴れる力を取り戻せ」は読んで
みたいですね。井田さんと安井さんは直接
行動のメンバーです。さらに、20代、
30代の若い世代が何を考えているのか、
何をしているのかの現状報告です。シエ
アハウスは菅谷さんたち3人の報告もリアル
でわかりやすい。労働運動関係の渡辺さん
は確か駿台の福井先生の教え子だったと記
憶しています。南守さんの言葉に力があ
りますね。

* 九条改憲阻止の会「10年の歩み」(情
況新書)が出版されました。本誌表4に宣
伝広告が掲載してあります。沖縄や日本全
国で読まれるべきものだと思います。阻止
の会について少し説明しておきます。岸信
介の孫である安部晋三の政権(第1次)の
登場に對抗するために、60年安保世代
が中心となり2006年に結成したもので
す。60年安保当時学生だった皆さんが、
社会人となり、定年退職したあと、46年
後に再び大衆活動家に戻り、九条を守る
ために結成したものです。安倍が短命だっ
たため沖縄現地での闘いに参加したりしま
した。そして2011年3・11福島原発
の事故のあと、その半年後の9・11に、
経産省前テントを立ち上げ、反原発運動の
最先頭に躍り出て、全国運動を切り開いて
きました。今では再稼働阻止の現地闘争や
国会前でさまざまな市民形式の運動が起き
てはいますが、原点は60年安保の学生
たちの経産省前テントの運動なんです。
霞ヶ関のと真ん中に反原発のテントが立て

り研究の第一人者で熊取6人衆の一人で
「熊取からの提言」(世界書院)の筆者です。
奥村さんは最近まで福島に在住し、これま
で本誌での原発事故の原稿を専門に書いて
います。蔵田さんは福島事故の詳細な事故・
発病を克明に調べ上げ、チェルノブイリ事
故と比較し、日本政府や福島県の嘘を事実
の例証で告発しています。

* それにしても日本の自然科学(物理)領
域の専門家の腐敗墮落は目に余るものがあ
る。水戸巖さんの継承者がほとんどいない。
熊取6人衆ぐらいなのか。物理学を自分の
飯の種にしているだけのようだ。水戸さん
のテレビ報道があるとお話があり、水戸
喜世子さん(奥様)にそんなお話をしたと
ころ以下の様なお返事をいただいた。

「悲しい現実ですね。産学協同どころか
軍学共同に群がるカッコつき科学技術者。
MBSのサイカさん(関西で唯一橋下知事
と堂々渡り合って出入り禁止になった記
者)はそこにも着目して取材してくれまし
た。東電の漁船の妨害のなかで、こちらも
漁船を出して魚を調べたり、海岸沿いの松
葉を採取して残留放射能を調べていた、福
島原発海岸から採取したホツキ貝から放射
性コバルトが検出したのです。まだ3号炉
4号炉が計画中の時のことです。その続き
はTVで。彼は確信を持っていました。
運転している限りは放射能を出している

* 書評は高橋宏幸さん。紹介は、菅孝行さ
ん。テーマは、佐野碩さんの一生涯だそう
です。佐野さんが後藤新平の孫というのは
初耳です。これから勉強させていただきます。
られると誰が予想できたでしょうか。

* さらにいつもの松平さんの文化時評や増
井さんのりべるたん報告、大久保さんのド
ロップアウト塾など連載されております。
松平さんは抗がん剤治療で大変だと思いま
すががんばっていますね。最近では放射能
汚染被害者としての運動を始められていま
す。

* 最後に、急遽掲載した柳田健さんの「城
崎勉さん救援」「時効について」について
はぜひ読んでいただきたいです。柳田さん
は第1次ブントの大先輩ですが、高齢でが
ん治療に専念しないといけないので、政治
運動や社会運動から引退を表明されまし
た。長期投獄の活動家への連帯だけは継続
されるということです。ブント系らしいとい
うのか、魂が入っていますね。尊敬すべき
生き様だと思います。

* 次号の予定
(6月7月号)特集…世界金融危機・書

原発いらない！全国から最前線の声を集めた脱原発情報マガジン（『紙の爆弾』2016年6月増刊号）

NONUKES voice vol.8

A5判/168ページ(巻頭カラー8ページ+本文160ページ)
定価680円(本体630円+税)

好評発売中!!



脱原発情報マガジン『NO NUKES voice』最新号！
より福島原地に寄り添い、新編集態勢のもと全面リ
ニューアル！

【主な内容】

- 《インタビュー》金平茂紀さん(TBS報道特集キャスター)
原発報道とテレビの危機
- 《インタビュー》今中哲二さん(元・京都大学原子炉実験所助教)
原発事故に「人災」を問えるシステムを!
- 《インタビュー》中嶋哲演さん(福井県小浜市・明通寺住職)
仏教者として反原発を闘う

《報告》本誌特別取材班

(シニア右翼の女神)櫻井よしこを自宅前で直撃取材!

【特集】分断される福島——権利のための闘争

木幡ますみさん(大熊町町議)／佐藤幸子さん(川俣町)／木田節子さん(富岡町)／布
施幸彦さん(ふくしま共同診療所院長)／國分富夫さん(原発事故被害者相双の会)／
大宮浩平さん(写真家)

《爆弾対談》田中宏和さん(「世に倦む日日」主宰者)×松岡利康(本誌発行人)

3・11以降の反原連・しばき隊・SEALDS

《報告》松岡利康(本誌発行人)

再び反原連に異議申し立て!——人の想いや厚意には真摯に応えよ! 異論を排除し
ない自由な運動への願い

報告と運動情報

経産省前テントひろば／再稼働阻止全国ネットワーク ほか。

回書出版 るくさいしゃ



【本社／関西編集室】〒663-8178 兵庫県西宮市甲子園八番町 2-1-301

TEL 0798(49)5302 FAX 0798(49)5309

【東京編集室／営業部】〒101-0061 東京都千代田区三崎町 3丁目 3-3-701

TEL 03(3238)7530 FAX 03(6231)5566

◆書店にない場合は、ハガキ、ファックス、メールなどで直接当社にご注文ください。
送料サービス、代金後払いにてお届けいたします。
メールでの申込み sales@rokusaisha.com ●郵便振替=01100-9-48334

評特集張一兵「レーニンへ帰れ」

〈巻頭〉田原牧インタビュアー・辻恵イン
タビュアー・大賀哲「アメリカ大統領選・報告」
・連載・矢吹晋(11回)

〈巻頭特集〉・張一兵「レーニンへ帰れ」
(哲学ノート)の読み方(書評)・寄川糸路・
稲葉守ほか

特集〈世界金融危機〉

●鎌倉孝夫「世界経済(現状分析)」●青
山零(東大経済・院)●吉村信之(東大経済・
院、信州大)●榎原均「グローバル資本市
場の発達と現状」●小林襄治「投資銀行と
は何か、何をしてきたのか」●矢沢国光「資
本主義の生成・発展・爛熟をどうとらえる
か」(下)ほか。ヘーゲル大論理学(概念
論刊行200年記念)号は、別冊情況(世
界書院)で出版します。お楽しみに。

●情況二〇一六年四月・五月
二〇一六年五月三十一日発行

●「発行所」情況出版株式会社
〒101-0065
東京都千代田区西神田三―二ウインド

西神田ビル五〇二

【電 話】〇三―五二二―三三三三
【ファックス】〇三―五二二―三三三九

●「編集発行人」大下敦史

●「印刷製本」(株)シナノパブリッシングプレス

●「表紙デザイン」杉本健太郎

●郵便口座記号番号 00180-8-49197

ISBN 978-4-915252-94-5 C0002

定価、一三八九円+消費税

落丁本、乱丁本はお取替えいたしません。

* 巻頭は、沖縄現地報告（深沢一夫）。矢吹晋先生の連載（11回）は南シナ海問題です。

参院選が終了したと同時に沖縄ではヘリパッドの攻防が展開されている。アメリカ大統領選で日米関係がどうなるのか心配なのか、安倍政権は焦り始めているようだ。沖縄の悪いところはすべてアメリカにあるという構図はそろそろ崩れるのではないか。沖縄の少女暴行は自衛隊員もやっており、事実、犯人は20年ほどの実刑にもなっているのだが、報道管制を敷いて話題にしないだけです。

6月19日、沖縄県民集会に参加してきました。参加者は6万5000人。現地集会の報告は、翌日の二大紙で克明に報告されています。「怒り、悲しみ限界」など。特に印象に残ったのは若い青年、男女の怒りではないでしょうか。彼ら若い世代の米国政府や日本政府への糾弾、たとえば玉城愛さんのあいさつは参加者全員に多大なインパクトを与えたと思います（ネット参照）。民衆の自己決定権は揺らぐことなく着実に若い世代に受け継がれていますね。沖縄は希望があります。これからの沖縄に必要なことは積極的な自立の構想だと思えます。日本の政党の下請けみたいなものはまずはいらない。時間がかかるかもしれないが沖縄独自の政党が必要だ。お隣の台湾ができて沖縄ができないはず

はない。沖縄ができるようだと言われ、済州島にも可能性がでてくる。そうすると東アジアの平和は確固たるものになるだろう。わたしは原点が島の人間なので当たり前に出てくる発想なんです、どうだろうか。

辺野古現地（テント）にも行き、安次富さんから現地情勢をお聞きする。また41年ぶりにひめゆりの塔を見学。時代は変わっても沖縄の心は何も変わっていない。そんなことを実感してきました。

* さて情況誌本号の書評特集は、張一兵「レーニンへ帰れ」、「哲学ノート」のポストテクストロジーの解説（中野英夫訳）出版記念特集（第1弾）です。

張一兵「レーニンへ帰れ」は、素晴らしいレーニン論ですね。おそらくレーニンを神様にまで高めた冷戦期の方はその真髓が即座にはわからないのではないかと。張先生のレーニン「哲学ノート」研究はおそらくこれからの時代のレーニンの思想に関する原点となるものだ。推薦文にあるジジエックの提言が真理に近いと思えます。その一部を紹介する。「張一兵教授のこの新しい本はただ中国社会主義建設のためのものだけでなく、その哲学的深みの中から共産主義の試みを復活させたいと思う人々全員にとって重要なメッセージを含んでいる。」

張一兵さんは、南京大学哲学科の先生です。広松渉氏の研究所も南京大学内に設置してくれています。南京大学共産党書記とか南京大学副学長だとかの肩書もおありのようですが、今頃の中国ではマルクスやレーニンをテーマにする学者、あるいはそんな肩書の先生は中国の若い研究者からすれば不人気の代表なのですが、ところが張先生は別格のようです。

日本に来ていた院生たちの何人から聞いたのだが、張先生には何とも言えない魅力があるという。現代思想系にも強いというのも魅力のようで、日本によくいる現代思想の解説者のレベルではない。しかもジジエックということの哲学的深みがあるということのようです。日本では中国批判が体制側も反体制側も強い。なんでも批判すればいいという習慣がある。特に左翼は革命も実現してもいないのに革命を実現した中国の暗部だけを見てあれこれ批判する情けないところがある。やれスターリン主義だとかという無内容な空文句である。人を批判するときはわれとわが身を自己反省してから言わないと誰からも信用されない。日本の新旧左翼の凋落は基本が腐っているという認識がないところにある。

さて、書評の筆者は2年ほど編集にあたった情況編集部の記事者、さらにヘーゲル研究者、寄川糸路先生、稲葉守先生にお願いした。編集

部の見解はレーニンの哲学的深化に簡潔に、具体的に触れております。寄川先生は中野さんとの交流があり、新しいレーニン像では意気投合しておりましたね。「哲学ノート」のポストテクトロジーの解説について根本的な理解をされております。

稲葉先生の書評は長文です。二度も丁寧な「レーニンへ帰れ」を読んでいただき、感謝しております。また編集過程でもケドロフについてロシア語で調査していただいた。失礼ながら学術的にはかなり厳密な方だとお見受けしましたね。すっかり信頼しております。おそろく「レーニンへ帰れ」は稲葉先生にかなりの衝撃を与えたのではないかと推測しております。結論としては、啓蒙書としては成功だが、専門書としては失敗というものです。それはそれでいいと思います。問題は中身ですから。稲葉先生は寺沢恒信先生のお仲間、ヘーゲル専門家ですから独特のご理解があるのかもしれない。世代的にはスターリン主義時代の古い世代のレーニン主義者でわれわれ60年世代と違い、新左翼的なマルクス主義やレーニン主義の地平を認めてはいない。簡単に言うにスターリン主義者なのかと思いますが、新旧左翼自体が冷戦期の産物でしかなくて、特にレーニンに關しては世界的に抹殺された経緯があり、現在では通用しないのも事実。それでもレーニンは不滅なところがあった、今蘇りつつあるところだと思えます。たとえば、白井聡さんと長原

豊さんがレーニン別冊(題名は「レーニン再見」)を本誌でも出版している(在庫なし)。結論的に言うに新旧左翼のレーニン論はすでに死滅している。ただし東アジアでは政治局という名のレーニン主義が形骸化して歪んで生き残っているという意見もある。もちろん私の意見ですが。やはりトータルな基本線ではない、ジジエックあたりのレーニン論が冷戦崩壊後の現在のものになると思えます。そしていよいよ張先生のレーニン論の登場ということになる。しかし稲葉先生の張一兵批判はそこに争点があるわけではない。張先生との対決は、ヘーゲルを読み込むような勢いで、「レーニンへ帰れ」を読み込み、先の結論を導き出している。つまり稲葉先生ご自身のヘーゲル研究者としての立脚点にかかわる問題として読み込んでおられますね。日本での「哲学ノート」の研究者であり、かつヘーゲル哲学の専門家としての自負にかかわる提言です。ポイントが、ヘーゲルの絶対的理論の方法である思弁的方法をレーニンのように弁証法的方法とみていいのかどうか、その根拠はどこにあるかです。本誌での久保陽一先生の論考「ヘーゲル論理学における「絶対的理念」の生成」の水準があればそのところを解けるのではないかと推測しております。ぜひお願いしたいです。

すでに張先生も稲葉提言は読んでおられます。誤解の部分はたいしたことはないので無視ですが、当然ながら張先生も反論を準備しておられ

ますね。9月11日の出版記念会のシンポジウムではかなりの厳しい論争になろうかと思えます。テーマは「哲学ノート」をめぐる弁証法の問題、ヘーゲル概念論をどう読むのかですね。

さて、それを機にレーニン、マルクス、ヘーゲルについての日中での大論争が起れば面白いというのが私の提案です。東アジアの政治文化は根本的に同じですから。そして世界のレーニン主義者をお呼びしての国際シンポジウムができれば最高ですね。わたしはすべてとは言いませんが、やると決めたら実行する性質なので。いまだ極左の癖が抜けていなくて困っています。

* 本誌の特集。ヘーゲル大論理学、概念論刊行200年記念特集が中心です。

ヘーゲル特集は情況誌の専売特許で、過去に何度かありました。広松さんの時代ですから当然でしょう。しかしわたしの情況誌になつてからは初めてです。しかし大論理学、概念論刊行200年記念と聞いたものです。やらないうけにはいい。時期的にレーニン「哲学ノート」や大論理学を拾い読みしていただく決断は早かったです。早速、加藤尚武先生に相談させていただく。熊野純彦先生には、山口先生の大論理学の新訳があることを教えていただきました。滝口清栄先生には若い先生たちを紹介していただきました。

* *

健康さんを見ても破産しているし読むに堪えない代物だ。あまり対象の違うものをごちゃごちゃ練りまわす必要はないのではないかと。

* *

実践家から見るとヘーゲルはとても魅力がある面ととても危険な面があると思えます。端的に言うに、日本の新左翼の内ゲバはヘーゲルの影響が大だとみていい。特にヘーゲル概念論のところは政治や党組織と結びつく危険極まりないです。セクト主義の完成形態を生むからです。有(存在)論、本質論、いわゆる客観的論理学は、移行すべき、つまり飛躍すべきところは主観的論理学(概念論)であってはいけません。これはヘーゲルの大論理学の大失敗です。もちろんヘーゲルの責任ではないのだが、概念の自己運動は党の自己運動へと飛躍してしまふ。レーニンの「哲学ノート」(ベルンノート)のすごいところは徹底してヘーゲルを学びつつも自分の立場を崩していないところ。ヘーゲルにのめりこむことはない。いわゆる左翼は知的訓練を受けていないものだからどうも信じ込む弱さがある。それはさておき、ヘーゲルのカント批判、つきつれば物自体の清算の仕事に問題があるのではないかという感じがします。誰かそんな研究者はいないのか。素人の直感です。この辺りはいざれ浜野喬士さんに考えていただくかと思えます。浜野さんの専門はカントですから。

の理解自体に多くの議論が必要で、しかも全体からするその意味を読み取るのに専門家の皆様も苦労されている。フォイエルバッハのような方はなかなかない感じですね。もちろん彼にはマルクスのようなヘーゲル弁証法についての内在的考察がないようです。それにしてもマルクスの弁証法とは何か、ヘーゲルとの違いは何かと問われれば大変困る問題ではありますね。そもそも弁証法概念規定が問題だ。

* *

さて、特集にある先生方の論考も何度か読ませていただきました。大論理学そのものの理解の上で研究者のレベルを垣間見た感じがします。感謝したいです。

わたしは実践家なのでヘーゲル左派がらみやマルクスがらみでのヘーゲル観しかない。雑学ですね。マルクスがヘーゲルを超えているとかいう意見もあるが、わたしもそう言うことがあるが本当にそうなのかはわからない。そもそもマルクス自身は特に弁証法について概念的に説明しているわけでもない。若いころの記憶では、許萬元先生から概念的把握という考え方を学び、その後加藤先生の東北大時代の精神現象学を読ませていただいた記憶があるだけ。だから大論理学についての考察や提言は初めてです。ヘーゲル大論理学を初めて読んだという印象です。ヘーゲルとマルクスをごっちゃにする人たちが学者もおられると思えますが、武市

加藤先生の提言は、過去的情況別冊ヘーゲル特集(1975年11月臨時増刊号)での上妻精先生との対談を含めて何度も読ませていただきました。弁証法とはなかなか厄介なものなようです。山口祐弘先生の野心的構想には驚きです。大論理学の新訳(作品社)は偉業です。熊野先生からは山口版で決まりだとか。論文の中身はわからないが、緻密で迫力があふれています。山口提案が理解できるようにになりたいと思います。滝口清栄先生のヘーゲル法哲学に関する問題意識はこれからの大きな課題です。ヘーゲル体系はヘーゲル左派がぶち壊しまし。ロレタリアートという階級を発見した。寄川先生は先に指摘しましたが、ポストモダンをちゃんと理解されている。新しいヘーゲル読みを探求されているものと思えます。ヘーゲルの講義録に着目する生きた観点は大事ですね。世界書院では「あいだの解釈学」(教科書)でお世話になっている。生徒との生きた関係を大事にするのはヘーゲル研究も同じようです。

また、わたしが参加させていただいている専門家のヘーゲル研究会の久保先生に論文を書いていただきました。とにかく久保先生はあの難解な大論理学を自分の言葉で説明してくれるので、実にわかりやすいです。

それにしてもヘーゲルの大論理学の読解はなかなか困難のようです。加藤先生の裸の王様という指摘は的確な表現です。一つ一つの提言

ヘイトと暴力の連鎖

反原連-SEALDS-しばき隊-カウンター

鹿砦社特別取材班＝編著 A5判／104ページ ブックレット 紙の爆弾2016年7月号増刊
定価540円(本体500円)

国会議員、著名作家、ジャーナリスト、学者らを巻き込んで隠蔽された
集団リンチ事件の知られざる真相を追及！
リベラル左翼勢力がもてはやす反原連・SEALDS・しばき隊・カウンターの恐るべき実態を明らかにする！



- 1 SEALDS奥田愛基君への手紙
- 2 [インタビュー] ろくでなし子 (美術家・漫画家) 「逮捕」も「ばよちん騒動」も笑いで吹き飛ばせ!
- 3 [対談] 高島章 (弁護士) × 田中宏和 (『世に倦む日日』主宰) しばき隊・SEALDS現象の病巣を斬る!
- 4 社会運動の中の獅子身中の虫 反原連・SEALDS・しばき隊・カウンター
- 5 反差別運動内で発生した深刻なリンチ事件の真相はこれだ!
- 6 急展開した「しばき隊リンチ事件」の真相究明
- 7 有田芳生参院議員の宣伝カーに乗ったしばき隊員に襲撃された市民
- 8 有田芳生参院議員の「集団リンチ事件」隠蔽関与の疑惑

好評発売中!!

SEALDSの真実

—SEALDSとしばき隊の分析と解剖—

『世に倦む日日』主宰 田中宏和＝著 B6判／総224ページ 並製／カバー装 定価：1200円＋税



突如現われ、2015年安保法案反対運動を席卷したとされるSEALDS—その<真実>とは? 背後の防衛隊＝「しばき隊」とは? 2万2000のフォロワーを持つ人気ブログ&ツイッター「世に倦む日日」主宰者が、知られざるSEALDSと、その裏部隊「しばき隊」の実態を分析し解剖した衝撃の書!

【主な内容】

- 第1章 SEALDS運動とは何だったのか
- 第2章 SEALDS裏の防衛隊＝しばき隊とは何か
- 第3章 SEALDSをめぐる知識人の動き

好評発売中!!

【本社／関西編集室】〒663-8178 兵庫県西宮市甲子園八番町 2-1-301
TEL 0798(49)5302 FAX 0798(49)5309
【東京編集室／営業部】〒101-0061 東京都千代田区三崎町 3丁目 3-3-701
TEL 03(3238)7530 FAX 03(6231)5566

◆書店にない場合は、ハガキ、ファックス、メールなどで直接小社にご注文ください。送料サービス、代金後払いにてお届けいたします。メールでの申込み sales@rokusaisha.com ●郵便振替＝01100-9-48334



さて、問題は概念論です。無批判的なヘーゲル研究というものはありなのかどうか? ヘーゲルも所詮は人の子ですから。ヘーゲルには止揚とか言いつつペテン的な飛躍が多すぎます。

中畑先生は概念論の移行を論じている。7の2のところは、レーニンが知ったら大喜びするテーマですね。「受動的実体は暴力を被らざるを得ないし、作用する実体は暴力を行使しなければならぬ。なぜなら、存在の直接性を止揚しうるのと同じく直接的である(外的である)威力の直接性すなわち暴力以外にあり得ないからである。」しかしこれはどういう意味なのか? なぜそう言えるのか。

三重野論文(「対立者の統一」もヘーゲルの最も危険なところをテーマに論じています。「大論理学」における「対立」とその進展の章です。

したがって「肯定的なもの」と「否定的なもの」として対立しているのは、もはや「対立」に属する二つの項ではなくて、「自己関係」と「他者との否定的関係」つまり「非対立」と「対立」というより高次の領域であることになる。云々。

ヘーゲルに対する三重野先生の意見はどうなのか? ヘーゲルの体系に入ると出るのは難しいのはよくわかります。すべてうのみにする必要があるのかどうか。

大河内論文「概念論」「認識の理念」の章の読解を見事に整理してくれています。一分の隙

もない論考です。わたしのお聞きしたいのは概念・理念の自己運動はどういう意味を持つているのかということ。端的に言えば、果たして正しいのかどうか。そんなことはあるのか? 最後、山脇論文は「推理は観念論の原理である」「観念は無限と有限との総合であり、全哲学は観念の内にある」というテーマから概念の構造まで、判断論の考察まで踏み込んでいただいている。ヘーゲル観念論とは何か。実にわかりやすいです。それにしても深い考察をヘーゲルはしているようです。

ヘーゲル自身は楽しみながら哲学を創造している感じがします。問題は、ヘーゲルはそれではないでしょうか、研究者はなんと考えるのか? そもそも絶対対知・絶対者というものは何か? 黒崎先生の論考は始元論です。マルクスとヘーゲルの論理的な違いはどこにあるのかお聞きしたいです。川瀬論文によれば、ヘーゲル・ルネサンスが起きているようです。英語圏ではどうなっているのか。少し希望が湧いてきそうな感じ。徳増先生の提言があるようです。徳増先生は原稿執筆予定だったのですが、体調が悪く別の機会となりました。

最後に、ヘーゲル特集は面白かったです。レーニンとの関係も深くあるのでしつこく継続したいです。

次号は経済学特集です。鎌倉孝夫先生はじめ現代帝国主義論・資本主義論が論じられることと思います。久しぶりに広松渉論が予定されております。お楽しみに。(大下)

●「編集発行人」 大下敦史

●「発行所」 情況出版株式会社
〒101-0065
東京都千代田区西神田三丁目二ウインド
西神田ビル五〇二

【電話】 〇三―五二―三三―三三九
【ファックス】 〇三―五二―三三―三三九

●「印刷製本」 佛シナノパブリッシングプレス

●「表紙デザイン」 杉本健太郎

●郵便口座記号番号 00180-8-49197
ISBN 978-4-91522-95-2 C0002
定価、一八五二円＋消費税

落丁本、乱丁本はお取替えいたします。

編集後記(8月9月号)―世界経済特集

日本にはまともな政党がない。冷戦期にはその時代に見合ったものがあつたのかも知れないが、今はない。現在がどんな時代なのかの具体的な考察がない。情況誌にかかわって17年の結論ですね。あえて言えば情況誌に掲載されてきた幾つかの論文が例外なんだという気がします。新年号で引退して次のステージに行きますので、今後とも情況誌をよろしくお願いします。

(巻頭論文)

* 沖繩・高江現地は激しい攻防が続いている。深沢報告を読んでください。産経新聞も現地で山城博治インタビューをしている。短い記事だが、権力側は思うように進まないで泣き言が多い。

* 矢吹晋論文「南シナ海仲裁裁定によつて沖ノ鳥島がイワになる」(中国観照12回)の提案は、安倍政権の領海ナシヨナリズムの危険性を余すところなく突き出したものです。もちろん大新聞報道も同じナシヨナリズムで、中国のみ仲裁裁定を守れと大騒ぎしている。つまり、この裁定に

よれば沖ノ鳥島も沖の鳥イワとなる。日本も沖ノ鳥島を放棄しなさいという画期的な提案だ。排他的経済水域200カイリおよび大陸棚延伸の対象から排除されるということだ。アメリカから言われるとすぐ認めるのが安倍政権の手法なのだが、今のところ「これまで沖ノ鳥島と言ってきたのでイワではない」などというペテン的な論理で居直っているにすぎない。安倍政権の論理はいずれ崩れ去ることは明々白々。なお、矢吹先生の新聞「沖繩のナワを解く」(情況新書、世界書院発売)が年内に出版されます。お楽しみに。

* 石岡裕さんの「喜納昌吉勝利宣言の意味」はなかなか考えさせられる問題提起ですね。この提案は沖繩人内部での大きな議論となるのかどうか。焦点は、翁長県知事の発言、「反対しながら(辺野古を)作らせる方が何かとやりやすい」が本当なのかどうか。現在はどう考えているのか。オール沖繩のコンセンサスを石岡さんはどう考えているのか。もともと翁長さんは自民党なのだし、辺野古に賛成だったはずで推進派といえるがなぜ反対になったのか。いろいろ議論となるかも。沖繩が日米の植民地であることは昔も今も変わらないのは事

実。沖繩の支配層は日米のもとの単なる利権集団でしかない。沖繩をどうしようなどという人は少ないのではないか。辺野古がどうなるのか、要は沖繩民衆の現場での闘いがすべてを決めるということだ。今現在の高江の攻防を見れば明らか(深沢報告参照)。わたしは1975年のひめゆり闘争以来の長い付き合いだが、そもそも沖繩に日本の寄生政党は必要としないという見解です。つまり社大党があればいい。独立かどうかを含めて沖繩人が真剣に考え行動するべき問題だ。日本人がなんだかんだというのではないし、どうせ本気で言えるのは現場の活動家ではないだろうか。

* 城崎勉さんの「司法の今を考える」は驚きです。第2次ブント(1966年)1969年の古い仲間なんです、分裂後、彼は少し遅れて赤軍派に参加し、M作戦(銀行襲撃)で逮捕されたところまではリアルな記憶がある。下獄もあと2年のところで超法規で釈放。その後断片的な噂、たとえばネパールで逮捕されたとか、は聞かなくてはいけませんが、城崎さん自身が何を考えているのか、はじめて知るありさまです。救援センターの山中さんからお話を聞くと

ヘイトと暴力の連鎖

反原連-SEALDS-しばき隊-カウンター

鹿砦社特別取材班＝編著 A5判/104ページ ブックレット 紙の爆弾2016年7月号増刊
定価540円(本体500円)

国会議員、著名作家、ジャーナリスト、学者らを巻き込んで隠蔽された
集団リンチ事件の知られざる真相を追及！
リベラル左翼勢力がもてはやす反原連・SEALDS・しばき隊・カウンターの恐るべき実態を明らかにする！

好評発売中!!

- 1 SEALDs奥田愛基君への手紙
- 2 [インタビュー] ろくでなし子(美術家・漫画家)
「逮捕」も「ばよちん騒動」も笑いで吹き飛ばせ!
- 3 [対談] 高島章(弁護士)×田中宏和(「世に倦む日日」主宰)
しばき隊・SEALDs現象の病巣を斬る!
- 4 社会運動の中の獅子身中の虫
反原連・SEALDs・しばき隊・カウンター
- 5 反差別運動内で発生した深刻なリンチ事件の真相はこれだ!
- 6 急展開した「しばき隊リンチ事件」の真相究明
- 7 有田芳生参院議員の宣伝カーに乗ったしばき隊員に襲撃された市民
- 8 有田芳生参院議員の「集団リンチ事件」隠蔽関与の疑惑



SEALDSの真実

—SEALDSとしばき隊の分析と解剖

「世に倦む日日」主宰 田中宏和＝著 B6判/総224ページ 並製/カバー装 定価:1200円+税

好評発売中!!

突如現われ、2015年安保法案反対運動を席卷したとされるSEALDS——その<真実>とは? 背後の防衛隊=「しばき隊」とは? 2万2000のフォロワーを持つ人気ブログ&ツイッター「世に倦む日日」主宰者が、知られざるSEALDSと、その裏部隊「しばき隊」の実態を分析し解剖した衝撃の書!

【主な内要】

- 第1章 SEALDs運動とは何だったのか
- 第2章 SEALDs裏の防衛隊=しばき隊とは何か
- 第3章 SEALDsをめぐる知識人の動き



【本社/関西編集室】〒663-8178 兵庫県西宮市甲子園八番町 2-1-301
TEL 0798(49)5302 FAX 0798(49)5309
【東京編集室/営業部】〒101-0061 東京都千代田区三崎町 3丁目 3-3-701
TEL 03(3238)7530 FAX 03(6231)5566

◆書店にない場合は、ハガキ、ファックス、メールなどで直接小社にご注文ください。
送料サービス、代金後払いにてお届けいたします。
メールでの申込み sales@rokusaisha.com ●郵便振替=01100-9-48334

図書出版 ろくさいしゃ
鹿砦社

情況関係にはグラムシファンが多いです。
*りべるたんの記事は久しぶりです。この間大型の特集があったので、掲載できなくてすみませんでした。

*情況から報告をしておきます。張一兵著「レーニンへ帰れ」(世界書院)の出版記念会が、京都、東京で行われました。いまどきレーニンなのかという壁をぶち破り、熱気のあるいい集会が実現できました。東京での記念会は白井聡さんにまわっていただきました。(報告は10月11月号)少し残念なのは日本発ではなくて中国発だということぐらいです。いずれジエックなどもお呼びして国際会議を持ちたいですね。時期が熟すのをじっくり待ちます。

*秋からの東京ルネ研・情況(主催)は、中国革命・文革・鄧小平的転換、天安門事件、中国の少数民族問題などをテーマにおこないます。ちきゅう座には予定を掲載します。(春は、林哲先生の「朝鮮戦争の起源」でした。)

*次号の特集「レーニンへ帰れ」シンポジウム(ヘーゲル大論理学概念論2000年記念)特集。丸川哲史特集。矢部史郎

16ページ書評特集など。ではお楽しみに(大下)

●情況二〇一六年八月・九月
二〇一六年九月三〇日発行

●「発行所」情況出版株式会社
〒一〇一〇〇六五
東京都千代田区西神田三一一二ウインド
西神田ビル五〇二

●「電話」〇三―五二―三三三三
「ファックス」〇三―五二―三三三三

●「編集発行人」大下敦史

●「印刷製本」(株)シナノパブリッシングプレス

●「表紙デザイン」杉本健太郎

●郵便口座記号番号 00180-8-49197

ISBN 978-4-915252-96-9 C0002

定価(本体価格)一三八九円+消費税)

落丁本、乱丁本はお取替えいたしません。